

学校運営協議会 会議実施報告書

このことについて、「岐阜県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則」第8条第1項に基づき、次のとおり学校運営協議会を開催しましたので、その概要について報告します。

- 1 会議名 大垣特別支援学校 学校運営協議会 (第3回)
- 2 開催日時 令和6年2月26日(月) 10:00~12:00
- 3 開催場所 大垣特別支援学校 会議室
- 4 参加者

会長	後藤 悦子	障がい者相談支援事業所ゆう	所長
副会長	伊藤 三枝子	清流の国ぎふ女性防災士会	会長
委員	岡田 浩	大垣共立銀行 江並支店	支店長
	加藤 千恵美	大垣市くすのき苑	所長
	福山 里恵	大垣特別支援学校PTA役員	
	川端 誠	大垣公共職業安定所 統括職業指導官	(欠席)
	国枝 由道	上笠自治会	会長
	山口 敏文	大垣水都ライオンズクラブ	会長
	山田 晃嗣	情報科学芸術大学院大学	教授
学校側	松原 勝己	校長	
	桐山 泉	事務部長	
	高木 靖	小中学部教頭	
	横山 浩明	高等部教頭	
	佐藤 鈴子	小学部主事	
	若原 真智	中学部主事	
	恵美 利達	高等部主事	
	橋浦 夏子	教務主任	

5 会議の概要(協議事項)

(1) 本年度の各学部を取組と来年度に向けて

意見1 中学部のキャリア教育の取組が面白い。卒業生の話を聞く機会はあるか。専門家のトークよりも生徒の心に響くのではないか。

意見2 職業講話がいいと思った。そういった機会がもっと多くもてるとよい。フレンズクラブに登録させていただいた。今後何かの機会にお役に立てるとよい。

(2) 高等部3年生の進路状況

意見1 フレンズクラブで協力できる場所があれば協力していきたい。車にステッカーを貼っていたら声を掛けられることがあった。小中高をつなげていって、保護者・社会・学校が連携して一緒の目標をもっていけるとよい。保護者の経済的な面を含めた困難さを社会で支えていって、最終的に自立を目指していって

ほしい。

意見2 フレズクラブが就労の力になる。

意見3 こういった環境のなかで大学進学を目指す方がいる。体験談をお話ししてもらえるといい。

(3) 学校評価アンケート実施結果

意見1 連絡帳で家での様子、授業の様子のやりとりをしている。感謝している。このような取り組みを他校にも伝えていきたい。

意見2 スポーツ少年団はボランティアで行っている。学校職員は若い人がいるのは分かるが、やはりお金をもらって行っているプロである。そういう意識をもって保護者とともに教育して行ってほしい。

意見3 子どもによって距離感が違うことは、保護者にとっても違和感があるのではないかと。性の目覚めを意識して、職員は距離感を考えるようにしてほしい。

(4) 指導・高評

意見1 昨年度と比較して、日常が戻ってきた感じがした。この運営協議会に参加し、先生たちと一緒に学校の運営にかかわっている意識が高まった。学校の応援団のような気持ち。学校の運営方針や子どもたちの特性を理解し、みんなで支え合う地域を作っていきたい。

意見2 式練習での在校生の言葉は、緊張している様子だった。卒業生は礼なども丁寧に行っていた。練習の賜物と感じた。

意見3 卒業生の言葉、マスクをとってもいいのではないかと。

意見4 卒業式の練習は温かい雰囲気よかったです。50周年記念事業で経験したことを、継続して続けていけるとよい。コロナがあけて行事等大変だと思うが、子どもたちの貴重な経験につながっている。今後も更に小さな気づきを大切にして支援してほしい。

意見5 先生方の努力がすごいと思った。感心した。

意見6 高等部の卒業式がすごくやわらかい雰囲気があった。生徒の顔が輝いていた。展示も素敵だった。

意見7 50周年とコロナの5類移行が重なった。各行事で更に地域に発信していくとよい。少年団でも、競技志向が強いと、弱い子の気持ちに寄り添えない。学校に出てくる子どもたちの小さな気づきを大切にしてあげないと、能力の差が激しい中で、学校に出てこれない子が出てくるのではないかと。それぞれの子どもの受け取り方にあわせて接していけるとよい。

意見8 卒業生の職業講話では、できるだけ卒業してすぐの身近な人で、失敗談を含めて話してもらえるといい。若い職員でも、小さな気づきを見つけることはできるはず。そういったことを保護者とやり取りしていけるといい。

○清流の国ぎふ女性防災士会会長 伊藤様より能登半島地震について

1月15日穴水町へ専門家として入った。避難所の支援経験者として、避難所を整えるために一般が入れない場所へ行った。15日～19日 電気なし。水なし。発生後2週間だったが、ライフラインのない生活。専門職が入る時期（弁護士、解体業等）で、非常時に便器にかけるビニールは7人で汚物の限界が来る。トイレは流してはいけない状況だった。

普段便器にたまっている水は逆流防止とにおい防止のため、使えないとなったらすぐに使用禁止にすべき。次々使ってしまうことで衛生が保てない状態になる。避難所のすべてがこの状態であった。

まずは専門職が防護服を着て、トイレの凝固剤を使ってすべての汚物を撤去。その上からビニールをかけていく。すべてのトイレが溢れている状態。避難者が協力してくれた。トイレの汚物をすべて除去した後、避難者に仕事の割り振りをを行う。しかし、そういったときにはトイレ掃除を希望する人がいない。トイレ掃除などは外部専門家やボランティアだけでやるのとは違う。避難者自らができるようにならないといけない。また、そういう時に学校の先生がやるべき、と思う人もいる。そうではない。

凝固剤の使い方を覚えるところから始める。年寄り、そんなもん年寄りにはわからん等と拒否的になる。他人事。自分の汚物は自分で、という意識をもつことが大切。平常時はいいが、災害時は年寄りもできるところで協力すべき。凝固剤は、若い子にはすぐ伝わる。若い子10人に伝えれば周りにもすぐに伝わる。その場の誰に伝えるかが重要。

収集車がトイレ汚物を回収するとき、水2リットル×6本の入っていた箱を使用するとよい。その中に汚物を入れていく。そうしないと重くてもてない。普通のごみ袋に入れていることがあるが、パッカー車が普通ごみと一緒に回収すると汚物が入った袋が破裂し、周辺を汚物だらけにしてしまう。汚物は小分けにして別で保管すべき。袋は下になった時に破損して結局不衛生になる。たまに、あえておむつを使用するという避難者がいる。それはごみが大量に発生する原因になる。やはり凝固剤の使い方を知っておくべき。外でするのは問題外。衛生が保てない。今のうちに凝固剤の使い方を見ておく。一回試しておくことが重要。

今、地震が起こった時、自分でできることは何か。メガホンなどで避難所で人手を呼び掛けると、みんな集まって来てくれた。ひきこもりの子も来てくれた。避難者の中で、できることをできる人で。ボランティアに頼ってはいけない。そこにいる人で乗り切る。ダンボールトイレはコーティングしてないと使えない。トイレ中は吸収、外は防水を基本とすることを覚えておくことよい。

福祉避難所では、体が元気な人が認知症であったりする。便を便と認識していない状態。目が死んでしまったような人もいた。福祉避難所にいられない方で在宅避難の場合は、支援物資は取りに来ることが前提。たまに持ってきてくれる場合もあるが、基本は自己責任。在宅避難者まで手が回らない。今後は、在宅で取り残されている人に支援しに行く。BCP（避難確保計画）は訓練してみて改善すべき。今までの訓練は甘すぎた。6m隆起するような地域に住んでいるということ意識する。立ち入り禁止区域にするのはいいが、トイレはどうすればいいのかまで考えていかなければいけない。

イギリスで作成されたものに、認知症マップの中に手を入れて揉むことができるものがある。精神的に安定する可能性がある。パニックのある自閉症の方にもどうか。聖徳学園大学で取り入れている。無料で提供されているので検討してほしい。太めの毛糸を寄付してもらえるとよい。少しでもパニックを減らす方法を試してほしい。

空もダメ、陸路しかないが悪路、海からもダメ。2か月たってもライフラインが整っていない。こんな状態の被災地は初めて。認知症や障害の子どもだけが二次避難した場合に、それで本当に助かるのか。弱い方、自宅避難も難しい。もっと総合的に考えていきたい。

6 会議のまとめ

- ・各学部の今年度の取組から、成果や課題が明らかになった。それぞれのステージで児童生徒に効果的なキャリア教育を進めていけるよう今後も検討していきたい。
- ・学校評価アンケートから、児童生徒の言動に現れる小さな気づきを見つけられる職員が期待されていることがわかった。そのためには、これからも教師としての専門性を高める努力が必要である。